

東京都におけるワカケホンセイインコについて

(財)日本鳥類保護連盟 藤井 幹

ワカケホンセイインコ *Psittacula krameri manillensis* は、ホンセイインコの一亜種で、原産地はインド南部やスリランカですが、人の手により各地に持ち込まれ、ヨーロッパからアフリカ、中東、アジア、アメリカなど、世界各地で野生化し問題となっています。日本でも1969年以降、ペットブームで持ち込まれたものが、籠抜けや故意による放鳥、業者から大量に逃げ出したなど様々な原因が重なり、各地で野生化した個体群が見られたようです。しかし、ほとんどの個体群は減少していきなり、現在は東京都を中心とする大きなグループと、千葉県千葉市、群馬県前橋市を中心とする20羽前後の小さな個体群に限られています。



東京都を中心とした個体群は東京工業大学（以下、東工大）のイチョウ並木をねぐらとしており、1983年には500羽が記録されていました。近年では1200羽から1500羽まで増加していますが、その増加傾向はとまっていると考えられています（個体数が安定する冬季の数値）。

繁殖生態

繁殖をしているワカケホンセイインコは、巣外育雛期を除いたほとんどの期間を営巣地周辺で過ごします。繁殖期は春先から6月にかけてですが、6月頃巣立った雛は直ぐに営巣地を離れ、時間をかけてねぐらまで移動します。神奈川県大和市（ねぐらから約23km）の調査では、その後は営巣地には戻らず、ねぐらから約10kmの場所で巣外育雛期を過ごしていたことが、発信器を用いた事例としてあがっています。また、標識をした巣立ち雛は営巣地に戻ってきていないことから、親鳥が営巣地に戻り始める11月頃には、巣立ち雛は親から離れて分散していくと思われます。

ねぐらにおける季節変化

ねぐらにおける個体数は、巣立ち雛がねぐらに連れてこられる6月から7月にかけて増加しますが、その後、秋期までには例年の個体数まで減少します。分布が拡大して新たな個体群が形成されるわけではないので、巣立ち雛の多くは、猛禽類やカラスなどに襲われているのではないかと考えられています。その後繁殖が始まる頃には、雌は巣穴に残るので、またねぐらの個体数は減少することとなります。

しかし、このねぐらも近年では利用が不安定な状況にあります。2007年11月には、一時的にねぐらからいなくなり、都内に分散したことがありました。原因ははっきりとしていませんが、ねぐらで待ちかまえる捕食者の圧力も関係しているかもしれません。このときは最終的にねぐらが復活しましたが、2009年4月、またねぐらからいなくなるという事態に陥ってしまいました。今回の原因も定かではありませんが、ねぐらの横に建築された建造物も関係しているかもしれません。もし、建造物が原因の一つとなっているのであれば、今後も不安定な状況は続くかもしれません。（Fig.1）

ねぐらが変わるということは、分布自体にも影響し、今まで東工大を中心として安定していた分布域が拡大していく可能性もあります。今後も動向をしっかりと観察していく必要があります。

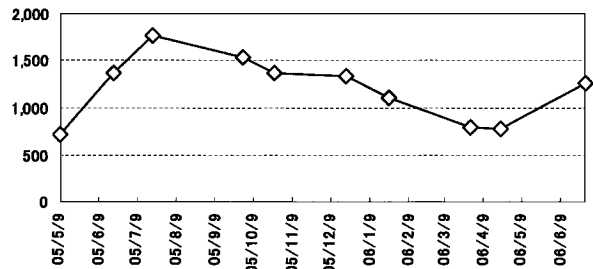


Fig.1 . 東工大におけるねぐらの個体数変動
芳聡（2006）ワカケホンセイインコの生態～繁殖行動
と個体数季節変動～ . 東工大卒業論文より引用

東京都を中心としたグループの分布

現在このグループは、東は荒川を境に、西は神奈川県、北は埼玉県まで分布しています。おおよそねぐらから30km以内を分布域としていますが、30km圏内であればどこにでもいるわけではありません。基本的には深い森を好まず、都市公園でも緑地の表面を利用してあまり中には入ってこないため、横浜方面や多摩地域のような森林が多く残る場所へは行かないようです。また、分布は営巣地を中心として広がっている場合が多いため、樹洞ができるような大木がある社寺林や屋敷林などが無い地域では、あまり観察されません。(Fig. 2)



Fig.2 . ワカケホンセイインコの分布

東京都、神奈川県、埼玉県で確認されている個体は東工大を行き来していると思われるが、神奈川県の最西端である伊勢原市の繁殖地では、いなくなるのは巣外育雛期のみで、その他の時期はケヤキの樹洞で寝泊まりしています。非繁殖個体も時々現れるので、東工大から来ていると考えていますが、まだ特定はできていません。ただし、神奈川県大和市と相模原市の個体は発信器の装着により東工大との往來を確認していますので、伊勢原市に現れる非繁殖個体もその可能性が高いと思われます。

繁殖分布

ワカケホンセイインコは樹洞等の穴の中で繁殖することは知られていますが、非繁殖個体も穴をのぞき込んだり出入りしたりするため、営巣確認が困難です。給餌も吐き出して与えるため、飛来してきた個体が餌を持っているかどうかは判断できません。そのため、繁殖をしていると断定するためには、穴から顔を出した雛や、雌が常に穴の中にいて、定期的に雄から給餌を受ける行動を確認する必要があります。(Fig. 3) しかし、観察時間の問題や、雛かどうかを見極めることの難しさから、繁殖していると思われる記録はあっても、確実に繁殖していると断定できる記録はごくわずかなのが現状です。そのため、繁殖の可能性が高い場所は多くありますが、現在までに東京都内で繁殖確認ができていたのは、新宿区新宿御苑、世田谷区桜上水団地、砧公園、目黒区等々力尾山台、北区香取神社、町田市森野だけとなっています。



Fig.3 . 穴から顔を覗かせる雛

情報提供のお願い

国内におけるワカケホンセイインコについては、まだ分かっていないことが多いのが現状です。分布、繁殖情報、何を食べているか、農作物に害を及ぼしているかどうかなど、どんなことでもかまいませんので、ワカケホンセイインコに関する情報がありましたら、情報をお寄せ下さい。よろしくお願ひ致します。

外来鳥の現状を調査します

海外から人為的に運びこまれ、野外で生活している野鳥を外来鳥といいます。古くからいろいろな種類の鳥が来ていますが、大正時代に狩猟鳥として移入されたコジュケイは、各地に分布し、今では日本の鳥として生態的地位（ニッチ）を確立し、帰化鳥になっています。また、ワカケホンセイインコは、昭和年代の半ばにペットとして輸入された個体群が起源となって、東京一帯に1000羽程度が生息し続けています。そして、平成時代に勢力を増しているのが、ソウシチョウとガビチョウ類。いずれも鳴声がすばらしく、江戸時代から飼い鳥として中国から輸入されていますが、野外で大繁殖を始めたのは1970年代以降。その原因ははっきりしていませんが、日本が金持ちになってペットブームが到来し、さまざまな生き物が輸入され、そのなかに鳥類も多かったと思われる。しかし、業者のもくろみが外れ、売れなかった鳥が大量に野外放棄され、現在にいたっていると考えられています。

全国的に見れば、生息が一番広いのはソウシチョウで、福島県～九州まで点々と分布し、茨城県筑波山、兵庫県六甲山、福岡県英彦山などとともに、奥多摩～秩父地域にかけて多数が定着しています。次いでガビチョウも関東以南に点在し、東京の山地一帯も高密度の生息地として知られています。ほかにカオグロガビチョウ、カオジロガビチョウの野外生息が知られていて、以上の4種は増えすぎて在来種と競合する恐れがあるとして「特定外来生物」に指定され、その動向が注視されています。

今回、以前から注目されていたワカケホンセイインコの現況をご紹介いただいた機に、東京都内の外来鳥の生息状況を調べてみます。次のような要領で、状況をお知らせください。

【報告要領】

- ワカケホンセイインコ情報；〒166-0012 杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F
 (財)日本鳥類保護連盟 藤井 幹 E-mail: fujii@jspb.org
 ソウシチョウ・ガビチョウ類・ワカケホンセイインコ、その他の外来鳥情報
 〒160-0022 新宿区新宿5-18-16 新宿伊藤ビル3階 日本野鳥の会東京支部
 研究部 Fax; 03-5273-5142 E-mail; kenkyubu@mbr.nifty.com
 報告内容； 1. 種類 2. 観察場所(住所も) 3. 生息状況(数も忘れずに)
 4. 報告者氏名・連絡先

外来鳥3種の分布状況

自治体名	種別分布		
	A	B	C
港区	○		
新宿区	○		
文京区	○		
目黒区	○		
大田区			○
世田谷区			○
渋谷区	○		
北区	○		
練馬区	○		
八王子市	○	○	○
武蔵野市	○		
三鷹市			○
調布市	○	○	
町田市	○	○	○
小金井市	○		
日野市		○	
狛江市	○	○	
東村山市	○		
西東京市			○
青梅市	○	○	○
福生市	○	○	
羽村市	○	○	
あきる野市	○	○	
日の出町	○	○	
檜原村	○	○	
奥多摩町	○	○	
26自治体	20	12	9

【凡例】○:生息確認
 A:ソウシチョウ
 B:ガビチョウ
 C:カオグロガビチョウ

フォト東京の鳥・6 写真は裏表紙をご覧ください

パパイアの熟実に来る鳥・メグロとメジロ 1982年8月 小笠原・母島にて

東京から南へ1000キロメートル。父島までは28時間、そこから母島へは3時間。2日がかりの船旅でたどり着いたとき、まず出迎えたくれたのは台風。4日間吹き荒れたあとは真っ青な空と照葉樹林の濃い緑、そしてコバルトブルーやエメラルドグリーンが広がっていたことが印象的でした。初めてみるメグロの姿を求めて島じゅうを歩き回りましたが、一番のウオッチポイントは宿の近くの熟したパパイアの実。メグロ・メジロ・ヒヨドリが次々におとずれ、ゆっくりその姿を楽しませてくれました。

〔川内博〕